みなとまち新潟で育まれた文化の総合博物館

古町花街への探検案内

新潟 増補改訂 古町花街の「今」

新潟市中央区
みなとまち
文化推進事業

日々の研鑽が育てる新潟古町花街の文化

日常の世界から離れた夢の世界へ、
お客様をひとときお連れするために、
今も昔も、古町芸妓は芸を磨きます。

今日の特別な一日を、
お客様に存分に楽しんでいただくために、
今も昔も、古町芸妓はおもてなしを学びます。

1982年　市山流六代目宗家 市山七十郎 稽古風景（提供：新潟日報社）

表紙写真モデル：左から洋子・和香・初音

舞踊・音楽・ファッション・食・建築・造園……。
古町花街は、北前船の寄港地として栄えた日本海随一の港湾都市・新潟の文化に、五感を通して触れることのできる街です。戦前からの歴史的建造物が多く残るこの街では、格式ある料亭が今も営業を続け、お師匠さんや先輩のお姐さん方の指導のもと、多くの芸妓さんたちが日々芸を磨いています。この街で暮らし、働き、楽しんできた多くの人々の手によって、長い時間をかけて大切に育てられ、時代の変化に合せながら守り継がれてきた文化が、今もここには活きています。

訪れる人を華やかな非日常の世界に誘う花街は、魅力的ではあるけれども、足を踏み入れるのに少しばかり勇気のいる場所に見えるかもしれません。しかし古町の楽しみは、贅を尽くしたお座敷遊びだけではありません。かつての新潟では、内々での小さなお祝い事や、ささやかな酒席にも芸妓さんが活躍するなど、花街は今よりずっと身近な存在として、人々の生活を彩っていました。そして今の新潟にも、仕事帰りにふらりと立ち寄れるすたんど割烹や、「ふるまち新潟をどり」をはじめとする様々なイベントなど、花街文化を気軽に楽しむ方法は、実は沢山用意されています。

この小さな冊子では、古町花街の「今」を担う人々の言葉を中心に、活きた文化の総合博物館ともいえる新潟・古町花街をご案内します。長い時間が育てた豊かな文化を持つ街を知り、自分の五感で体験してみれば、きっと私達の世界は楽しく広がってゆくはずです。

2016年　市山流七代目宗家 市山七十郎（撮影当時：七十世）稽古風景

目次

04 - 09　花街を支える芸・花街が育てる芸　市山流宗家・市山七十郎インタビュー
10 - 13　花街に生きる　古町芸妓 扇弥・延子インタビュー
14 - 15　花街を更新する　柳都振興会長・中野進インタビュー
16 - 19　みなとまちの迎賓館・古町花街の料亭
20 - 21　花街の舞台を楽しむ
22　花街を気軽に楽しむ
23　古町花街MAP

花街を支える芸・花街が育てる芸

差し出す手や視線ひとつが、
あるはずのない花や月を見せる。
短い一曲の唄が、
一時間のお芝居にも匹敵する
男女の恋物語を描き出す。
お座敷が、限りなく
想像力を遊ばせる場へと広がる。
芸は古町花街に力を与え、
古町花街は芸を育てる土壌となって、
互いに支え合っています。

こうした古町花街と芸の支え合いの要となる一人が、新潟を拠点とする日本舞踊市山流の七代目宗家にして、新潟市初の無形文化財保持者である、市山七十郎さんです。多くの古町芸妓が学び、新潟の文化を牽引してきた市山流の芸の今とこれからについて、七十郎さんにお伺いしました。

役柄の心を大事にする市山流の〈肚から出る芸〉

「役柄の心意気や心根というものを理解して演じ踊ること。それは、四代目（一八四六～一九一八）が大切にしていたという〈肚（はら）から出る芸〉なのだと思います。古町のお座敷で芸妓たちが踊る小唄振りは、一分半ほどのごく短い演目です。けれども、曲中には一時間のお芝居と変わることのない、男女の出会いと別れの物語が唄われています。実際には屏風を背にして、ただ一人で踊っていても、川や海や月など様々な情景や男女二人のやりとりが見えるよう、役柄の心を大切に踊ることが理想です。」

市山七十郎『うしろ面』りゅーとぴあ能楽堂（2016年12月18日）

日本舞踊市山流七代目宗家・新潟市無形文化財保持者

市山七十郎（いちやまなそろう）

歌舞伎役者から出発した市山流が大切にしてきた芸。七十郎さんは、その高い理想を古町芸妓に伝えようとしています。

「ただ振りをまねるだけでなく、役の心を写し、物語の世界を作り出す。そのためには、唄と振りの意味を考えることが欠かせません。例えば踊りのなかで、山を指し示すとします。そのときの僅かな手の角度の違いが、はるか遠い山を指しているのか、近くの山を指しているのかを変え、そこから想像される物語の世界を変えます。また、好きな人の手を取るときと、嫌いな人の手を取るときには、同じ動作でも、手の出し方、視線のあり方が違うでしょう？ 歌詞の内容をひとつひとつ解説しながら、振りの意味を考え、役柄の心を大切に踊れるようお稽古しています。どうすれば若いお弟子さんたちにも分かるだろうかと考えながらお稽古をつけることは、私にとっても勉強になっています。」

代表的演目『うしろ面』の心と市山流の芸

お座敷で芸妓として踊るお弟子さんと、お師匠さんが目指すものは、ともに役柄の心。七十郎さんは、市山流を代表する演目『うしろ面』を例に、市

◀古町９番町　市山流稽古場にて

のは、こうした市山流の芸にお弟子さんたちが惚れ、付いてきてくれたからなのです。」

芸が結ぶ「家族」にも似た絆

「私が小さい頃には、何百人もの芸者衆（芸妓）が、朝から晩まで毎日ここへお稽古に来ていました。それも、五代目と六代目が同じお稽古場に二人隣り合って、それぞれに三味線を弾きながら違うものを教えるという状態です。すぐ隣で別の曲を演奏しているところでよく踊れたと思いますが、集中していると自分の受けているお稽古の音しか聞こえないのですね。」

芸への思いを共にし、日々お稽古に励む。芸に結ばれた濃密な関係のなかで、市山流と古町花街は支え合ってきました。

「例えば、芸者衆が仕事をするなかで、面白くないことがあったとします。そうすると彼女たちは、夜中でもお酒やビールを持ってうちへやってきて、勝手に飲みながら話を始めます。お酒を飲まない五代目や六代目は、お茶を飲みながら彼女たちの愚痴をうんうんと聞いていました。お稽古を続けていると、お弟子さんたちの性格や、身体や心の調子がよく見えるようになります。今日はどこか具合が悪いなということから、今この子は恋をしているなというようなことまで。芸の追求を通じて深いところで分かり合う、家族にも似た強い絆が、市山流と古町花街の間にはあるのです。」

「芸者衆も市山流を大切にしてくれました。ある時、お稽古場の近くで火事がありました。そのときには、お座敷に出ている芸者衆が全員、お客さんを放り出してこちらへ駆けつけたものです。そして、私たちが何もしないうちに、箪笥を開けて着物を全部出して、大切なものを避難させてくれました。自分たちが市山流を守るのだという感じでした。お座敷から駆けつけるのですから、皆、裾の長い引き着の裾をまくり上げて荷物を担いだのですよ。」

花街とともに新潟の文化を守る意地

「新潟に拠点を据えた三代目から二百年近く続く古町花街と市山流の関係は、切っても切れないものです。市山流の発展は、古町花街の花柳界の発展と一体だと思いますし、市山流と花街が発展することが、新潟の発展にも繋がるのだと私は考えています。」

四代目中村芝翫、五代目中村歌右衛門、初代市川左團次など錚々たる歌舞伎界の面々、新派劇の川上音二郎と親交を結んだ四代目、藤間流や花柳流など他流派の門をたたいて芸を磨き、女優としても活躍して舞台経験を積んだ五代目、十三代目片岡仁左衛門や二代目中村鴈治郎らと共演した六代目、国立劇場や海外での公演会を開催し「うしろ面」で文化庁芸術祭賞を受賞した七代目……市山流の歴代家元は、広い視野に立って芸を磨いてきました。そしてその芸の力を支えとして、「ふるまち新潟をどり」の企画・振付・構成・指導を務めるなど、地元新潟市の文化の発展に力を尽くしてきました。

「市山流のように地方に宗家があり、しかもその地で長く歴史を刻んできた流派は他にありません。新潟に拠点を置いてきたからこそ、市山流は他の流派にはない独自の古い芸や演目を残せました。けれども一方で、地方都市を拠点に伝統文化を守ることは、とても難しいことです。身近な地元にあるものこそ、その良さにはなかなか気付きにくいのかもしれません。古町花街との繋がりと、ここ新潟でやってゆくのだという意地がなければやってゆけません。しかし、市山流や古町花街の文化は失くしてはならない貴重な財産です。変わってゆく時代を越えて、その伝統を伝えてゆきたいと思っています。」

尼姿の後頭部に狐の面を着け、二つの姿を演じる『うしろ面』

江戸末期に岩井かほ世が新潟に伝えたと言われる『うしろ面』の狐の面

山流が大切にする「役柄の心」について、さらに聞かせてくれました。

「尼と狐の二つの姿を一人の演者が身体の正面と背面で踊り分ける『うしろ面』は、市山流にしかない変化舞踊です。この踊りでは、正面の尼の姿と背面の狐の姿を、一つのものとして踊らなければなりません。狐が、人になりたいという欲望を抱えて尼に化ける。けれども、哀しいかなどこかに狐の姿が現れてしまう。『うしろ面』の物語では、このように葛藤する役柄の心が大切です。ですから、正面の尼の姿で踊っているときには、どこかに絶えず背面の狐の本性を見せるよう心掛けますし、背面の狐の姿で踊っているときには、どれほど人間になりたいと切望しているかを見せるようにします。その時見せている姿の背後にあるものを常に感じさせることが重要なのです。」

こうした細やかな「役柄の心」の追求を通じて、市山流の踊り手は代々、年齢や性別、そして人をさえ越えるような芸の挑戦をしてきました。

「四代目はかなりの歳になってから、怪童丸、つまり金太郎の子供のころを演じました。年齢も性別も全く違うはずなのに、観客には子どもが見えたと言います。五代目（一八八九～一九六八）は若い時から老人役を得手としてきましたが、芸歴六十年記念公演の『笠地蔵』では、人を越えてお地蔵様を演じました。六代目（一九二二～二〇〇六）もまた、五十代のときに、何百年も生きている少年という『菊慈童』の難しい役どころに挑戦しました。市山流が新潟で長く続いてきた

市山流を継ぐ・伝える舞台

花街と手を携え、新潟の文化を守るという七十郎さんたちの決意は、先代の六世市山七十郎の十三回忌追善供養と、長く七十世として活躍してきた七代目の七十郎襲名披露の場である「市山会」舞台公演（二〇一八年二月十七日）にひとつの実を結びます。古町芸妓として市山流の門を叩いたばかりの一年生の初々しい踊りから、新名取として舞台に上がったお弟子さん、七十郎さんとともに長く芸の道を歩まれてきた方々の円熟の芸まで、「市山会」はそれぞれの踊り手の魅力と、市山流の幅広い世界を堪能できる舞台となりました。

花街とともに芸を継ぐ・創造する

この舞台で市山流に代々引き継がれてきた七十郎の名の襲名を披露した七代目は、六代目の振付による『島の千歳』『三十石の夜舟』を踊りました。特に『三十石の夜舟』は先代の振付と芸の魅力を伝えるとともに、実の母でもある六代目と七代目の親子の縁を繋ぐ曲なのだと七十郎さんは語ります。

「『三十石』は母が自分自身で踊るために振付し、好んでいた演目です。短くはありますが、洒落た面白い曲です。京から大阪までの淀川の情景や、船頭をはじめとする人々の姿を描き分けるところに、役柄をしっかり把握し、変化に富んだ振付を得意としていた六代目の特色がよく出ています。六代目は若い頃に大阪の吉村流で修行したこともあり、大阪の雰囲気もうまく捉えられています。

さらにこの曲は、約十五年前に六代目が急な病に倒れた際に、私が代役として踊ったのが最初という、思い出深い曲でもあります。とはいえ、なかなか母の境地までは辿り着けません。母は重心の落とし方やキレがすばらしい踊り手でした。私も最初の頃よりは役柄を掴めるようになったと自負していますし、舞台に情景を思い浮かべてゆく力には自信を持っています。それでも、まだまだきれいに踊ろう、見せようという余計な意識がどこかにあるように思います。自分を戒めつつ、母とは異なる自分の〈味〉を出そうと思いながら踊っています。」

また、この『三十石』には、七十郎さんとも同世代で、芸の道を長年共に歩まれてきた古町芸妓のたまきさんこと市山七十純さんの演目と連続で見せる演出が施されていました。

「たまきさんが踊られた『おぼろ月』は今回のために私が振付けた新作で、もどらぬ想い人に文を書く女性の心情描写を主とした難しい曲でした。長く芸妓を続けてきて、男女の機微には私より通じているはずのたまきさんにも、この曲の女性の心情は簡単には分からないというのです。そこで、たまきさんとふたりで悩みながら歌詞を読み、振付を決めてゆきました。

本番では、最低限の舞台装置で微妙な心情を描くこの曲と、舞台装置を一切使わずに情景と人々を描きわける『三十石』を、暗転だけで繋いで、一連のものとして見せました。踊りひとつで世界を描くこの二曲を繋ぐことで、ある雰囲気を出そうという試みです。」

先代から引き継いだものを、古町花街の仲間たちとともに自らのものとして磨き、さらに新たな創造を試みること。七十郎さんたちの営みは、文化を受け継ぐことと創造がひとつの連続したものであること、そして花街が文化の継承と創造に果たしてきた大きな役割を改めて考えさせてくれます。

『三十石の夜舟』（写真提供：市山七十郎）

次世代の担い手・古町芸妓たちの挑戦

「さらに今回の舞台では、あやめこと市山七十奈緒が『うしろ面』、あおいこと市山七十凌香が『鷺娘』と、若い弟子たちが大曲に挑んだことが大きかったと思います。二〇一六年に私自身が新潟・東京・沖縄で『うしろ面』を踊る機会がありましたが、これが若い弟子たちには大きな刺激となったようです。その時に公演に付き添って着付けなどを手伝ってくれた弟子たちが、『うしろ面』をはじめとする市山流にしかないものを『自分たちが継いでいかなければ』と発奮し、自ら挑戦を申し出たのです。」

この挑戦は、大曲を踊ったお弟子さんはもちろん、市山流と古町芸妓全体の将来に意味あることだと七十郎さんは続けます。

「今回の挑戦は大変大きなものでしたので、一回でうまくいくものではありません。私と同じようには踊れないということは、彼女たちも知っています。そこで弟子たちには、あなたはあなたの踊りを踊ればいいのだと伝えました。もちろん、練習は厳しくしていますので、周囲からはあんなに怒られてなぜ辞めないのかと言われることもあるようですが……。けれども、たとえば『うしろ面』が『あれはお師匠さんしか踊れない』ということで終わってほしくないのです。弟子ひとりひとりが、自身の引き継いだもの、自身の持っているものを次の世代に伝えてくれること。今回の挑戦がさらに他の弟子たちの挑戦へと続いてくれること。この二つを期待しています。その思いは、あやめやあおいたちも同じです。彼女たちもまた、後輩たちを育てたいという責任感を感じるからこそ、一生懸命に頑張っているのです。」

そして七十郎さんは、市山流のお弟子さんたちの力と可能性を信じ、厳しくも弟子への期待に満ちた優しい言葉を続けます。

「舞台が終わってからのほうが実は大変なのだと思っています。今回舞台に立った弟子たちは皆、普段の自分の力から三段階位上がったことをしたのだと思います。そこまでには大変な努力がありましたが、そこで終わってはだめなのです。『あの舞台は良かったけれど、普段のお座敷はちょっと……』ということでは仕方ありません。古町芸妓として活躍している弟子たちには、お座敷でも『さすがあの舞台で踊った子だね』と言ってもらえるよう、今後も努力を続けてほしいと思います。」

古町花街を支え、古町花街が育てる芸は、七十郎さんとお弟子たちが二人三脚でたゆまぬ努力を続けることで受け継がれ、磨かれてゆきます。

「市山会」舞台挨拶
（写真提供：市山七十郎）

花街に生きる

古町芸妓　扇弥（せんや）・延子（のぶこ）

中学校の同窓生だったふたりの少女。
ふたりはともに芸を磨き、
古町芸妓となりました。
そして七十歳を越えた今も、
ともにお座敷に立ち、
若い芸妓を育てています。

六十年の歳月をともに
古町花街で生きてきた素敵なふたりに、
芸妓という職業、
後輩芸妓への思いについて伺いました。

古町花街のこどもたち

古町芸妓の家に生まれ、昭和三二年にデビューした扇弥さん、巻の芸妓の家に生まれ、新潟の置屋から昭和三三年にデビューした延子さん。ふたりのお座敷デビュー当時を、延子さんは次のように振り返ります。「当時古町には二百人以上の芸妓がいたのよ。そして今のＡＫＢ48やＮＧＴ48の少女たちと同じように、芸妓同士で人気を競っていたの。」扇弥さんも続けて「トップになるのは本当に難しくってね。芸のない子はお座敷に呼んでもらえないのよ。」と語ります。

軽やかに息の合ったふたりのやりとり。それもそのはずです。二人は、未来の芸妓や料亭の跡取り息子ら古町花街関係者の子弟が多く通った新潟市立二葉中学校の同窓生。気心が知れた幼馴染なのです。ふたりにとって、古町花街は思い出深い故郷であり、そこで働く人々はこども時代から親しんだ仲間でもあります。

「中学を卒業して十五歳そこそこで芸妓になって、お座敷で大人の相手をするのだから大変よ。でも、自分の仕事が認められれば楽しくて、早く夜のお座敷にも出てみたいと願っていたの。」と扇弥さん。「当時の芸妓たちは、親のため、兄弟のため、家のため、と考えて頑張ったの。たとえば私の親は、私を置屋に預けることで、お金を前借りしていたのね。そのお金を働いて返し終わる前に私が逃げてしまったら、親が困ってしまうのよ。」延子さんは、厳しい当時の状況を振り返りつつ、次のように続けます。「でも、今になって思えば、七十歳過ぎても現役でいられるなんて、こんな仕事はなかなかない。この仕事に就いて、本当に幸せだと思っているのよ。」

お座敷ならではの芸を磨く

「昼間は地味に事務仕事をしている人が、夜になると人間が変わったように色んなお座敷芸を披露する。私がお稽古に行くと、どこかの会社の

photo 上:「二人道成寺」新潟県民会館、1968年　左: 延子　右: 扇弥

旧齋藤家別邸にて　左: 扇弥　右: 延子 ▶

身近な特別・古町花街

古町芸妓の魅力は、しっかりと芸を身に着けたお座敷のプロでありながら、まるでお母さんやお姉さんのように、家族的な親しみを感じられるところにあると言われます。そのような古町芸妓の親しみやすさは、地元商店街との関係にも現れています。写真は、昭和35～36年頃の古町6番町から8番町で開催された商店街の七夕まつり。延子さんと、同期の小千代さんが撮影会のモデルを務め、まつりを盛り上げました。古町芸妓は、地域に溶け込み、地元に愛されてきたのです。

支店長さんが先にお稽古していたということもしょっちゅう。古町芸妓はそういうお客様のお相手をしなければならないんですもの。お稽古を怠けるわけにはいきませんよね。」かつての古町のお客様の芸達者ぶりを、地方（じかた）として自慢の咽を磨き続けてきた延子さんはこのように話します。

男踊りを得意とする扇弥さんもまた、高い水準の芸が求められた古町芸妓ならではの努力を振り返りつつ、今の時代にその芸を伝える難しさを語ります。「延子さんは清元に、私は藤間流の舞踊にと、ふたりともよく東京までお稽古に行ったのよ。人間国宝だった藤間藤子先生に教わって、歌舞伎役者の坂東玉三郎が着ていた衣裳で踊ったこともあるの。昔は芸を磨く機会が頻繁にあったのね。私たちはあらためてお稽古というのでなくとも、親や先輩たちが実際に唄ったり踊ったり、その様子を幼い頃からいつも身近に見聞きしてきたの。今思えば贅沢よね。今の若い芸妓たちは、芸の土台を作るそうした機会がなかなか持てない。そのなかで芸を磨かなくちゃならないのだから、大変よ。」

お座敷の芸を伝える

ふたりは口を揃えて、若い芸妓たちに「本物の芸」「芸妓さんにしかできないお座敷芸」を身に付けてほしいと話します。踊りや唄の基本はもちろん押さえた上で、多様なお客様のリクエストにも応じられる柔軟さと、気品を失わずにくつろいだ冗談や遊びを取り入れられる余裕を持つこと。「上品ながら地方色あふれるお座敷」を古町芸妓の理想とするふたりは、後輩たちとともに高い目標を目指すことを喜びとしています。けれども、昔のやり方をただ後輩に押し付けても上手くゆきません。今と昔の違いをそっと見せることで、後輩たち自身に考えてもらおうとふたりは心がけています。

「十八歳から二十歳で柳都振興に入社する今の芸妓たちが芸妓らしくなるのは、六、七年経って新人の振袖さんから独り立ちの留袖さんになる頃。この時は悩みもあるけれど、仕事の面白さがようやくわかってくる時でもある。誰でも一度は、やめようか続けようかと迷うもの。今は芸妓になることを自分自身の意思で決める時代だから、かえって難しいかもしれないわね。芸妓の道しか選べなかった私たちとは違って、他の生き方も選べるのだもの。でも、そこを乗り越えて続けてほしい。私たちのお座敷でなければと、遠くから何十年も古町に通ってくださるお客様もいらっしゃいます。芸妓は続ける価値のある仕事なのよ。」と延子さん。扇弥さんは隣で、「おたがいこの道六十年よ、びっくりしちゃうわよね。」と微笑みます。芸の道をともに歩んできたふたりは今、天職である芸妓の仕事を存分に楽しみながら、未来の芸妓を育てています。

お堀のあった花街・古町

扇弥さん、延子さんに古町の街並みの魅力をお聞きすると、おふたりは揃って、昭和三九年に埋め立てられたお堀を惜しまれます。「一番堀から堀端には柳と桜が交互に植えられていて、季節ごとに芸妓がモデルになって撮影会をしたの……。」「雪が降るお堀のある街並みを、お客様と相合傘で歩くと本当に絵になったの……。」ふたりの話は尽きません。大規模な都市計画が作り出したのではない、一軒ごとの主人の個性が見える古町の街並みに、お堀はうるおいと統一感を与えていました。

残念ながらお堀はもうありませんが、かつての古町の面影をうかがえる場所は、現在も8番町・9番町を中心に点在しています。古町花街はこうした風情ある街並みを味わえる、散歩の楽しい街でもあります。

西堀の古町芸妓（撮影：中俣正義）

photo左上から：ふぐのランプが目印のかき正は、2階部分までが昭和4年築、3階部分は昭和20年代の増築。（東堀通9番町）
旧有明周辺の風情ある佇まい。東新道に面した建物は明治38年築。周辺は石畳の舗装とされるなど、街並み保全の取組みも行われています。（古町通9番町）
昭和初期の建築と思われる金辰の落ち着いた小路。玄関のガラス戸には、粋な意匠が施されています。（西堀前通9番町）
風格ある鍋茶屋の門構え。行形亭と並び、全国有数の規模と歴史、格式を誇る料亭です。（東堀通8番町）

花街を更新する

柳都振興株式会社 取締役会長 中野 進

今から三十年前、古町花街は存続の危機を迎えていました。約二十年もの間、古町は新人芸妓を迎えることができずにいたのです。このままでは、新潟が誇る古町花街が消えてしまう。その危機を打開するため、一九八七年に生まれたのが、株式会社の社員として芸妓「柳都さん」をお座敷へと送り出す、柳都振興です。全国的に見ても先進的な取組を続けている柳都振興の挑戦を、中野会長にお伺いしました。

花街の危機を救う新しい「旦那」

かつての花街では、芸妓は「置屋」に所属して働くものでした。各置屋は、幼少時から芸妓候補のこどもたちを住み込みで抱えて芸を仕込み、芸妓へと育てあげます。芸妓育成に必要な多額の稽古代や衣装代の多くは、地主や豪商をはじめとした地元新潟の「旦那」たちが負担していました。

しかしながら、戦後大きく社会が変化するなかで、このような花街のあり方は、次第に困難となってゆきます。柳都振興は社会の変化に合せて、古町花街を未来へと引き継ぐ使命をもった会社です。

『旦那』という言葉は、お布施や施しという意味を持つ、サンスクリット語の『ダーナ』を語源としています。物流の拠点・交易地であるみなとまち新潟にとって、大切なお客様をお迎えする場として、あらたまった商談の場として、古町花街は必要不可欠な街でした。かつての旦那衆は、個人的な道楽から花街にお金を使ったのではありません。自らの家業の発展、さらには新潟全体の発展のために、商業活動に必要な古町花街を守ってきたのです。柳都振興の設立は、古町を精神的・経済的に支えてきた大地主や豪商がいなくなるなかで、新しい『旦那』を作る試みでもありました。古町は特定の個人や企業のものではなく、新潟に暮らす人々が育てた共有財産です。今も物流の盛んな新潟が、そうして生まれた貴重なおもてなしの場を失って良いのか。この問題意識はすぐに理解されて、地元有力企業約八十社から資本金七〇〇〇万円が集まりました。」

中野会長の頭には、阪急電鉄の小林一三による宝塚歌劇団の設立も思い浮かべられていました。「小林氏は、宝塚歌劇団の設立によって平凡な温泉地・宝塚を、全国に知られた一大観光地へと変えました。古町花街には、歴史ある料亭という素晴らしい劇場があり、市山流の芸能がある。新潟の豊かな農業・漁業・酒造業を背景とした食事とともに、新潟の芸能と人情を最高の形で体験できる。途絶えかけた芸妓を育て、古町を宝塚以上の観光拠点としよう。当時、ちょうど新潟交通社長として公共交通に関わっていた私は、そう考えたのです。」

新しい「置屋」の奮闘

「難しかったのは、芸妓の担い手を探すことです。なにしろ二十年間一人のなり手も現れず、日常で着物を着ることもなくなったなかで人を探さねばならないのです。まずは、芸妓たちが安心して働ける職場環境を整えました。当時の高卒初任給平均の約二倍の給料を用意し、社会保険制度を整備し、マンションの寮を準備しました。しかしそれでも人はなかなか集まらず、私自身も町内で地道な呼びかけを繰り返しました。」こうした人材確保の努力は、芸妓が新潟市の顔として認められることが増えてきた現在もなお続けられています。産休・育休、賞与……企業として整えられる福利厚生制度は、この三十年間でさらに充実しました。職業としての芸妓の魅力を若い世代にもっと知ってもらうために、高校生向けの就職ガイダンスなどにも積極的に参加しています。

さらに、近年の柳都振興では、戦後二十年間続いた芸妓不在の時代を乗り越えるための取組みにも力を入れています。「多数のベテラン芸妓のお姐さん方が若い芸妓の育成に協力してくれたことで、柳都振興はここまでやってこれました。しかし、元気な彼女たちも今や六十代から七十代。いつまでも頼ることはできません。そこで近年、音大の教授をはじめ邦楽の専門家を東京から呼び、鳴り物や長唄の稽古をする機会を月に何度か設けています。世代を越えた芸の継承を目指して始めたこの取組みですが、芸妓たちの芸も格段に向上し、いい効果がありました。また、芸妓たちが自分の芸を見つめ直し競い合う場として、『ふるまち新潟をどり』をはじめとしたお座敷以外の機会も大切にしています。」

金辰にて　1958年（撮影：中俣正義）

柳都振興では、芸妓たち一人ひとりが長期的なキャリアプランを描けるように、様々な支援も行っています。「二〇一五年四月、津乃あおいさんが柳都振興から独立しました。柳都振興の設立以来はじめてのことです。私たちはこれを、芸妓育成の成功事例と捉えてバックアップしています。かつて置屋で育った芸妓たちは、芸妓として成功すると、新たな置屋を開くなど芸を支えに独立して仕事をするのが常でした。柳都振興が育てた芸妓たちも、努力次第では独り立ちし、より充実した仕事ができるのだとなれば、若い芸妓にとってこの上ない目標となるでしょう。新入社員・新人芸妓の振袖さんから、一人前の留袖さん、各年代のお姐さん、どの年代もバランスよく揃い、それぞれが役割分担をしながら古町花街を盛り上げ、伝統を繋いでゆくことが私たちの思い描く理想です。その理想の実現のためにも、あおいさんの事例は重要です。」

中野会長が教える、お座敷遊び入門

最後に中野会長は、若い世代に向けて、無理なくお座敷で遊ぶ方法を教えてくれました。「夜六時ごろから、ラーメンでもカレーライスでもいい。まずはお腹を満たしておくんです。そして八時を過ぎたら、予約しておいた料亭へ行く。おつまみ程度の食べ物とお酒をお供に、芸妓との時間を楽しむ。こうした方法なら、居酒屋で飲んで二次会でカラオケへといった、現代の典型的な飲み会ともさほど変わらない、若い人のポケットマネーでも支払い可能な金額でお座敷を楽しむことができるはずです。私たちも若いころにはそんな風に遊んだものでした。安価ではあるけれど、料亭も芸妓も本物ですからね。料金以上に気持ちは充実すると思います。料亭や芸妓にとっても、夜遅くのお客様は有り難いものですしね。」古町花街をこよなく愛する現代の「旦那」中野会長は、未来の古町を支えてくれる後輩「旦那」たちがお座敷へやってくるのを、心待ちにしています。

（写真提供 鍋茶屋）

みなとまちの迎賓館・古町花街の料亭

古町花街の魅力を知るには、
実際にお座敷を体験するのが一番。
北前船の昔から、古町の料亭はみなとまち新潟の迎賓館として、
全国各地からお客様をお迎えし、新潟の魅力を伝えてきました。

今も古町の料亭は、新たなお客様のお越しを心待ちにしています。
初めて古町にいらっしゃる方への
メッセージとともに、料亭を紹介します。

行形亭

「時間をかけて磨かれてきた
おもてなしの場を楽しんでください」

江戸時代中期、元禄年間の創業。二千坪の庭を囲んで、趣向を凝らした「はなれ」の座敷が並ぶ、贅沢な空間が魅力の料亭です。
気軽に立ち寄れる喫茶室をオープンするなど、老舗の誇りを持ちながら、花街の遺産を今に活かすため、新しい料亭のあり方へと果敢に挑戦しています。
「まずはお昼のお座敷や、喫茶室を入り口に、料亭の味・庭・建築・おもてなしを楽しみにきてください。」

行形亭（いきなりや）

昼（11:30～14:00）　13,000円から
夜（17:00～21:30）　22,000円から
喫茶室（14:00～16:00）月曜定休（シーズン営業）
新潟市中央区西大畑町573　TEL: 025-223-1188
定休日：日曜・祝日（10名以上の予約で昼のみ営業）

鍋茶屋

「料亭は、日本料理を中心とした
文化の継承者です」

弘化三（一八四六）年創業。明治から昭和初頭にかけて建てられた木造三階建の空間には、ふんわりと良い香りが満ちています。出汁にこだわったお料理が鍋茶屋の自慢です。
「新潟の食材を活かした和食で、農業や漁業に取り組む生産者と消費者をつなぎ、良いものを持続的に生み出すスパイラルを作ることがこの料亭の使命です。
ぜひ鍋茶屋に、季節を感じにおいでください。」

鍋茶屋（なべぢゃや）

昼（11:30～14:00）　11,000円から
夜（入店時間17:00～19:00）　19,000円から
新潟市中央区東堀通8-1420　TEL: 025-222-6131
定休日：不定休

小三

「日本文化が育てた
美意識の生きる場です」

明治二十三年創業。静かで落ち着いた店内には、店主自ら飾り付けた美しいしつらい。いつでも飽きない発見があってほしいとの心遣いから、ひと月に何度も手を入れることもあるそうです。

和食の伝統を守りながら、肉料理を取り入れたり、オリーブオイルなどの新しい食材を用いたり、常に新たな献立の工夫を重ねています。

「料理は特殊なところではありません。本来の日本の良さを感じにお越しください。」

小三（こさん）

昼（11:30～14:00） 8,000円 から
夜（17:30～21:30）13,000円 から
新潟市中央区西堀前通8-1509
TEL: 025-223-5606
定休日：日曜・祝日（相談に応じます）

金辰

「古町花街は、品のよい遊びができる街です」

粋なデザインの玄関を入ると、永年知る人の家に来たような、くつろげる雰囲気。

茶懐石に力を入れた先代の遺産を受け継いだ、本格的なお料理と器が自慢です。大勢で芸者さんを呼び、賑やかにお財布にも優しく遊ぶ常連さんも多いとか。

「しっかりとした芸のある芸妓と、文化をとりいれた遊びができるところが古町の魅力です。」

金辰（かねたつ）

昼（11:30～15:00） 3,500円 から
夜（17:00～22:00） 5,000円 から
新潟市中央区西堀前通9-1535
TEL: 025-222-4808
定休日：日曜・祝日（相談に応じます）

お目当ての料亭が決まったら、まずは直接予約の電話を。希望の日時や人数、お座敷の目的や予算とともに、要望を伝えます。おもてなしのプロが心を込めて、特別なひとときを用意してくれるでしょう。
芸妓さんへのお礼である花代も、古町では事前に明示されていますのでご心配なく。新潟三業協同組合加盟店の場合、1時間9,720円が芸妓1人の花代です（平成28年4月1日現在。詳細は各料亭へご相談ください）。

お座敷遊びのススメ

古町にはたくさんの料亭が軒を連ねています。通りから見る佇まいも良いけれど、もちろん一番素敵なのは、お客様だけが知っているお座敷の空間です。はじめてでも緊張する必要はありません。開かれたみなとまちに生まれた料亭はいつだって、「いちげんさん大歓迎」です。

一〆（いちしめ）
新潟市中央区東堀通9-1395　TEL: 025-229-1551
昼（11:00～14:00）4,000円 から　夜（17:00～21:00）7,000円 から
定休日：毎月曜日

かき正（かきまさ）
新潟市中央区東堀通9-1407　TEL: 025-222-8291
昼・夜（11:00～22:00）5,000円 から　定休日：日曜・祝日（相談に応じます）

割烹 萬代（かっぽうばんだい）
新潟市中央区万代5-11-20 ANAクラウンプラザホテル新潟1F　TEL: 025-245-3340
昼（11:30～）5,000円 から　夜（～21:00）8,800円 から　※2日前までのご予約制

きらく
新潟市中央区西堀前通8-1513　TEL: 025-222-6036
夜（17:00～23:30）3,000円 から　定休日：日曜・祝日（相談に応じます）

寿ゞむら（すずむら）
新潟市中央区古町9-1484　TEL：025-229-4020
夜（17:00～23:00）一次会16,500円から、二次会6,000円から
定休日：土曜・日曜・祝日（相談に応じます）

大善（だいぜん）
新潟市中央区東堀前通9-1386　TEL: 025-228-1916
昼（予約に応じて）3,000円 から　夜（予約に応じて）5,000円 から
定休日：日曜・祝日（相談に応じます）

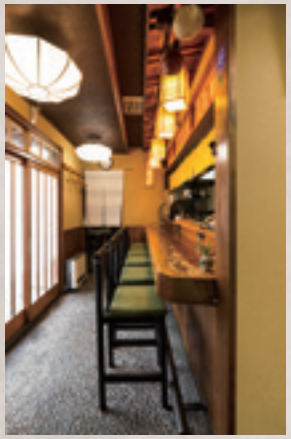
大丸（だいまる）
新潟市中央区古町9-1482　TEL：025-222-8153
夜（17:00～22:00）8,000円から　定休日：土曜・日曜・祝日（土曜は予約により営業）

ホテルイタリア軒 螢（ホテルイタリアけん ほたる）
新潟市中央区西堀通7-1574　TEL: 025-224-5128
昼（11:30～14:00）1,500円 から　夜（平日17:30、土日祝17:00～21:00）7,500円 から
定休日：年末

※ この冊子で紹介した料金は目安です。表記料金のほかに、税・席料等が必要です。
詳しくは各料亭にお問い合わせください。

すたんど割烹　やひこ

「花街ならではの通りの風情を楽しみながら
気兼ねなくお立ち寄り下さい」



より身近に料亭の味を楽しみたいなら、古町には「すたんど割烹」があります。街歩きの合間や仕事帰りに、思い立った時に予約なしでふらりと立ち寄り、カウンターや小上がりで、その日のおすすめをアラカルトで召し上がれ。女性の一人客も大歓迎です。運が良ければ、2階のお座敷で働く芸妓さんの姿を垣間見られるかもしれませんよ。

やひこ

夜（17:00～22:30）
晩酌セット2,000円 から
新潟市中央区東堀通9-1396
TEL: 025-222-6208
定休日：日曜・祝日
（お座敷の営業は相談に応じます）

ふるまち新潟をどり

出演：古町芸妓　振付・構成：市山七十郎
年に一度、りゅーとぴあ新潟市民芸術文化会館・劇場で開催。市山流家元による鑑賞講座、行形亭での前夜祭、呈茶、花街弁当の会など、芸妓との時間や花街の雰囲気を楽しめる多彩な関連イベントも毎回開催しています。
第30回は、2018年9月23日を予定しています。

「第29回ふるまち新潟をどり」（2017年）（写真提供 りゅーとぴあ）

佐渡金銀山と奉行所の存在を背景に、古い民謡から生まれた『相川音頭』　りゅーとぴあ能楽堂（2016年12月18日）

花街の舞台を楽しむ

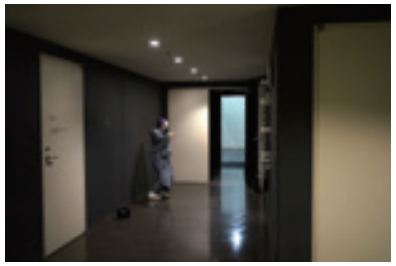
古町花街の文化を楽しめる場は、
お座敷以外にも広がっています。
なかでも「ふるまち新潟をどり」は、
年に一度の晴れ舞台。
古町芸妓総出演で、
日々のお稽古で磨いた芸をご披露します。
きりりとした男装での相川音頭や、
柳都振興所属の若手芸妓が挑戦するお芝居など、
普段のお座敷ではなかなか見ることのできない
演目も目白押し。
毎年関連イベントも多く開催される、
古町花街あげての一大イベントです。

あちらの廊下では、若い芸妓さんが、本番直前まで一心に練習を繰り返しています。こちらの部屋では数人がかりで舞台衣装の着付け中。廊下に出された机の上には、各演目に使用する小道具が所狭しと並べられ、出番を待っています。若い芸妓さんはお姐さん方のアドバイスに熱心に耳を傾け、お姐さん方は緊張する後輩たちをあたたかく見守っています。第二十八回「ふるまち新潟をどり」の舞台裏のひとこまです。

古町花街の常連さんにとって、「ふるまち新潟をどり」をはじめとした舞台は、お座敷では見ることのできない芸妓たちの晴れ姿を楽しむことができる特別な場です。お座敷はこれから……という方々にとって舞台は、未知の花街を手軽に垣間見られる、絶好の機会です。

振付・構成を担当する市山七十郎さんは、芸妓たち自身にとっても、舞台公演は大切なものだと語ります。「お座敷だけでなく舞台での発表の機会があることが、古町芸妓たちの芸を磨き、幅を広げてきました。例えば、普段の芸妓の装いでは、男踊りに挑戦することはなかなかできません。けれども、舞台をきっかけとして男踊りの稽古をしっかりと積んでゆくと、日頃の女踊りでも、腰が落ちた良い踊りが踊れるようになるのです。そもそも、歌舞伎は出雲阿国による男装の踊りから始まったものでした。芸妓たちが舞台での定番演目のひとつとしている『相川音頭』も、そうした歌舞伎の伝統を踏まえつつ、新潟ならではの地方色が取り入れられた一曲です。」

お座敷でも特別な機会にしか踊られない『相川音頭』は、芸妓たちにとっても憧れの的。最近では、舞台での公演にあたって、三名の踊り手の座をオーディション形式で競い合って決めているそうです。古町芸妓たちの舞台は、お座敷での芸を支える、最良の切磋琢磨の場であるのかもしれません。



「第28回ふるまち新潟をどり」楽屋風景（2016年、PHOTO：榎本千賀子）

花街を気軽に楽しむ

古町花街では「ふるまち新潟をどり」の他にも、花街を気軽に楽しむことのできるイベントを多数用意しています。古町花街の魅力を、ぜひ一度ご自分の五感で体験してみて下さい。

にいがた夏／冬・食の陣

（夏：7～9月、冬：1・2月）

お得なセット料金で、古町芸妓の舞と地元の銘酒・旬の味覚を楽しめます。
「芸妓の舞コース」（夕食・飲み物付き） 15,000円から
新潟三業協同組合 TEL：025-222-2237

料亭の味と芸妓の舞

（5～7月、10～12月、2～3月）

お得なセット料金で、芸妓の舞と老舗料亭の伝統の味を楽しめます。
「料亭の味と芸妓の舞」（昼食付き）5,000 円 から
新潟三業協同組合 TEL：025-222-2237

古町花街ぶらり酒

（5・10月開催）

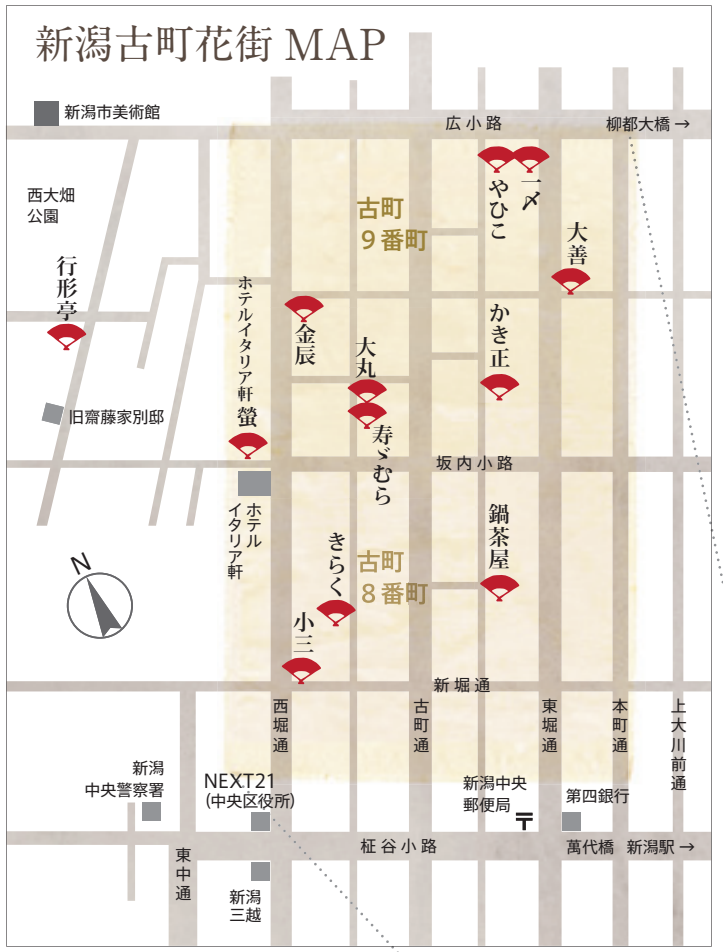
チケット1～2枚で古町花街界隈飲食店の「ぶらり酒セット」が楽しめます。割烹などのお店にも気軽に足を運べます。
古町花街ぶらり酒事務局 TEL：070-5367-0358

新潟花街茶屋
～新潟古町芸妓の舞鑑賞～

新潟のかつての商家のお屋敷「旧齋藤家別邸」を舞台に、芸妓の舞とお座敷遊びが体験できます。
（公財）新潟観光コンベンション協会
TEL：025-223-8181

料亭の味と芸妓の舞

新潟花街茶屋（写真提供 新潟観光コンベンション協会）

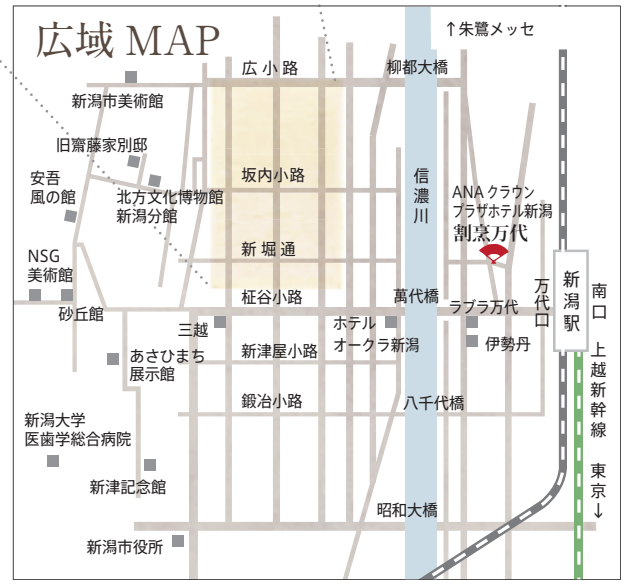


古町花街は、新潟市中央区古町通り8番町、9番町を中心としたエリアです。ここには多くの料亭が軒を連ね、古町芸妓が活動する、活きた花柳界が存在しています。戦前の歴史的建造物が数多く残る街並みは、平成27年には新潟市民文化遺産に認定されました。

この冊子に登場した料亭

下記に記した各店では、古町芸妓とともにお座敷を楽しめます。

行形亭 025-223-1188
一〆 025-229-1551
かき正 025-222-8291
割烹 萬代（ANAクラウンホテルプラザ新潟内）
..... 025-245-3340
金辰 025-222-4808
きらく 025-222-6036
小三 025-223-5606
寿々むら 025-229-4020
大善 025-228-1916
大丸 025-222-8153
鍋茶屋 025-222-6131
ホテルイタリア軒 螢 025-224-5128
やひこ 025-222-6208



アクセス JR新潟駅万代口バスターミナルより新潟交通バスに乗車し「古町」にて下車。所要時間は約10分です。古町を経由する路線は、多数出ています。

＊掲載している料亭情報などは変更されている場合があります。
詳しくは各料亭にお問い合わせください。

制作
新潟大学 地域映像アーカイブ研究センター
新潟地域の生活のなかにある映像を発掘し、整理・デジタル化・分析することを通して、映像メディアの社会的なあり方を考え直している。また、新たな文化遺産として映像を社会のなかに蘇らせるべく活動を行っている。

写真
坂口綱男・日本写真家協会会員（表紙・p.3-8, 20, 裏表紙）
写真家。コマーシャルフォト、ポートレート等の分野で活躍。新潟市出身の小説家坂口安吾の長男であり、安吾を顕彰する文化施設「安吾 風の館」館長。

村井 勇（16, 17［下］, 18-19）
写真家。記録映画『阿賀に生きる』で撮影スタッフを務める。担当はスチール写真。97年新潟市万代リターナにて初個展「ぽちぽちいこか」。その他個展多数。

中央区 みなとまち文化推進事業
増補改訂版 新潟古町花街の「今」

2018年3月17日 発行

発行：新潟市中央区地域課
企画：大倉 宏（砂丘館）
制作：新潟大学 人文社会・教育科学系附置
地域映像アーカイブ研究センター
文章・編集：榎本千賀子（新潟大学）
デザイン：飯塚由美子（パルスデザイン）
印刷・製本：株式会社第一印刷所